

農業を支える情報基盤整備について

今回の講義で学んだこととして、農業インフラの整備や農業 IoT や ICT について、

講義中にこの言葉を多く聞いた。インターネットやロボット機器を用いた農業の効率化、

熟練の農家の勘の可視化などこれから先、農家の減少は免れないと思われる日本において、必ず必要となる技術だと感じた。しかし、農業はスマート技術を使用すれば簡単に

効率化できるものではなく自然災害や野生動物による被害との闘いを避けられない。講義中に農業用機械に電気を送る配線ケーブルが野生動物に噛まれてちぎれてしまうことを知った。インターネットを使用した機器や調査法が多いことから、自分の中の想像

では遠隔で農業を行い農家の労力を減らすものだと思っていたが、実際に現場で試して

みることで初めてわかるこの重要性を具体的な野生動物の配線の例で実感できた。溝口教授の現場主義の言葉の意味を改めて理解した。

スマート農業のような機械を用いて効率的な農業を図ることについて疑問に思うことは、農業従事者の年齢がほぼ高齢者が多く、跡継ぎも人口が減少傾向にある日本では

難しいというなかでの高齢者の方々にスマート機器の使用を薦める方法についてです。

完全な偏見になってしまうのですが、私の周りにいる高齢者の方達はインターネットや

それに近い機能を持つ機器に比較的疎い傾向があると感じます。農業の効率化を促す機

器の導入には、農家の機器に対する抵抗はあるのでしょうか。もしくは使用方法の十分

な説明が行われているのでしょうか。もう一つの疑惑としては機器のコストとパフォー

マンスについてです。農地一つにつき得られる農作物は限られており、それを売る値段も大きく変化しづらいと考えると、機器の導入は単純に支出だけが増えているようになりますがコストについては解決ができているのでしょうか。

1, 震災後の復興、飯館村について

東日本大震災により発生した福島の原発事故によって起こった福島県の農作物に対する偏見について心が痛むことが多い。大きな被害を被ったわけではないが、実際に被災した身として、原発によって発生した何が危険で何が危険でないのかを知ろうともせずに批判するものに対する怒りを感じる。震災が起きた直後から現地に赴き研究、活動している溝口教授の言葉はとても力を感じた。ここでも溝口教授の現場主義を痛感する。現場を何度も訪れているからこそ言葉の説得力を感じた。復興について話し合いをしたとき、福島の復興ツアーに目が留まった。福島の復興がどれだけ進んでいるかを紹介する名目だが飯館村のような現実を体験できにくいものだとあった。復興をもたらす鍵は人間の力だと思っているので、現地の復興だけでなく他の場所からの注目を集めていくことの重要性を学んだ。